



人生生涯 小僧のころ

慈眼寺住職・大阿闍梨
だいあじやり

塩沼亮潤

大峯千日回峰行

金峯山寺^{きんがせんじ}で得度したのが昭和六十二年。平成三年に百日回峰行。翌年、千日回峰行に入行する。大峯千日回峰行。

一日四八kmの険しい山道を一六時間かけて、奈良・吉野山から大峯山という標高一七一九mの山まで往復する。年間約四カ月、九年がかりの修行。

いったん行に入ったら、決して途中でやめることはできない。足の骨を折っても、不慮の事故に遭っても、一日もやめることはできない。夜十一時半に目覚め、滝場に向かう。気合を入れて滝に入り身を清める。一日の始まり。いっどこで倒れ、朽ち果ててもいいように白装束をまとう。行半ばにして潰^{つぶ}えた時の自用短刀を腰に差す。高低差が一三〇〇mあり、時期によっては



塩沼住職が開山した慈眼寺(じげんじ)

温度差が三〇度になることもある。一瞬たりとも気が抜けない。一歩、足の置き場を誤れば、崖から転落しそうな場所もある。道中、百十八か所の神社や祠^{ほくら}で般若心経を唱え、祈っていく。「調子の良い日、悪い日ではなく、悪いか最悪かのどちらかでした」行に入ると一カ月ぐらいで爪がボロボロになり、三カ月目には血尿が出てくる。死にかけたことは三度。四百九十日あたりの十日間で一〇kgほど痩せた。生きるか死ぬかの瀬戸際だった。腹を完全に壊し、食べれば下痢、食べれば下痢の繰り返し。首も回らなくなり、腫れあがり、熱が三九度を超え意識朦朧^{もうろう}となって歩いていた。振り向くと、すぐそばまで熊が迫っていたことがある。一旦は逃げかかったが、咄嗟^{とつさ}の判断で熊に向かっけいき、驚いた熊はうわっとのけぞり逃げた。命に関わると言う意味ではマムシ。どこに潜んでいるか、あるいは先にあるものが小枝なのかマムシなのか、暗い夜道では判断が出来ない。知らず踏み潰^{つぶ}してしまったことや間近にいたマムシとにらみ合ったことも。「尻尾の方を踏んでいたら、そこで終わりでしたね」

テレビのドキュメンタリー番組。流れていたのは比叡山の険しい山道をひたすら歩き続ける修験者の姿だった。その時、遠く離れた東北の町で一人の少年がその画面に見入っていた。「道」を求めて、道を歩く。そのひたむきな姿に激しく心を揺さぶられていた。千日回峰行^{せんじつかいほうぎょう}。

「自分の人生はこれだ」夢の一滴が人生の源流に落ちた。その時、少年は十一歳。今から三三年前。仏教のことも、まして得度^{とくど}や般若心経^{はんにゃしんけい}の意味も知らない小学生だった。千日回峰行をした。

修験道の中でもとりわけ厳しい「行」といわれる「大峯千日回峰行」^{おほのみねせんじつかいほうぎょう}、「四無行」^{しむぎょう}、「八千枚護摩供」^{はちせんまいごもくぐ}を満行した。仙台・秋保^{あきほ}の里、慈眼寺の住職・塩沼亮潤さん(四三歳)今は勤行、講話、野菜作りの「日常」という里の行に励む。「この行が一番難しいのかもしれない」

マムシは目に見えるので避けようもあるが、小さくて危険なものの代表格はヤマダニ。

笹藪^{ささくさ}のようなところでいて、人が歩いてきた時にくっついてくる。衣の中に入り込み、皮膚の中に体を押し込み血を吸う。うまく取らないと、中に入った頭がそのまま残ってしまう。太ももであれば、そこが倍くらいに腫れあがる。ヤマダニには何度も刺された。

歩いて行きながら、十分に一度全身を手で払うくらいしか予防策はない。六月の梅雨時にはアブが出てくる。二、三十匹のアブが一緒についてくる区間があり、刺されると激痛が走る。そのあとにはたまらないほどの痒さが続く。

しかし、行の間は一匹たりとも殺生はしたくないと心がけた。落石。前に延ばした杖を上から落ちてきた大岩に持っていた杖と同じ目に遭ってました。崖崩れにも遭った。上にも行けず、下に迂回することも出来ない。崩れたところをズブズブともぐり、下に押し流されながら渡った。

雷雲の中に入ってしまったことも。あたりは真っ暗になり、稲妻が地上を這うように走り、轟音を発して、岩を直撃して砕く。草がなぎ倒され、土が抉り取られる。それでも奇蹟のように生きていた。その困難は自分を鍛えるための試練だと思いい、卑屈になることはなかった。

■塩沼亮潤(しおぬまりょうじゅん)慈眼寺住職 昭和43年宮城県生まれ。61年東北高校卒業。62年吉野山金峯山寺で出家得度。平成3年大峯千日回峰行満行。

平成11年吉野・金峯山寺1300年の歴史で2人目となる大峯千日回峰行を果たす。12年四無行満行。18年八千枚大護摩供満行。現在、仙台市秋保・慈眼寺住職。大峯千日回峰行大行満大阿闍梨。



「「つだけ胸を張って言えるのは、どんなに辛く苦しい時も『嫌だな、行きたくないな』という日はたった一日もなかったことですね」

千日目、山に行き、山から帰ってきた。達成感は一切なかった。明日から行かないのだから、と思っただけ。

平成十一年、大峯千日回峰行を満行。吉野山金峯山寺一三〇〇年の歴史で二人目となる

回峰行の中で小さく光るエピソード。

その日は暴風雨だった。バケツをひっくり返したような雨。山に入れば、襟元まで泥が入ってくる。

いつもの場所でおにぎりを取り出し、笠で雨を防ぎながら食べようとしたが、深くかぶった笠も役に立たず、雨は激しく横殴りで侵入してきて、おにぎりにあたる。雨水でほぐれた米粒がポロポロと地面に落ちていく。

を」と祈ったという。

家に残っていたのは三千円。

「今、これしかない。でも養育費や生活費をもらいたくないね。三人で頑張ろう」

暗さや不安は微塵もなかった。貧しくはあるが、楽しい毎日だった。近所の人や親戚の人が夕方になるとおかずを持って集まってくる。中学生だというのに、夕食にはビールまでついた。

アルバイトを始める一方、パチンコ屋にも通った。床に落ちていた玉を拾い、ある程度溜まると玉を弾く。玉が出ると、米、味噌、醤油に換える。「どうもこの子の家は貧しいらしい」店員がよく出る台を教えてくれたり、客が玉を分けてくれるようになった。

その店に通う教師とも仲良くなった。「どうだ、今日は出てるか?」「もうバンバン出てま

崩れ落ちていく飯を雨と一緒にすすりながら食べている時、突然涙が込み上げた。

「自分はなんて幸せなんだろう。今、自分にはこのようにおにぎりが用意されている。しかし、このご飯粒ひとつ口に出来ずにいる人たちがどれほどいるだろうか」吹きすさぶ暴風雨の中で、とめどなく泣いた。

「最悪の境地の中で、最高の幸せを得た瞬間です」

伸び伸びと耐える

大峯千日回峰行が終わった瞬間、ほっとすることもなく翌年の「四無行」に意識は切り替わった。四無行は九日間「断食、断水、不眠、不臥」つまり「食わず、飲まず、寝ず、横にならず」を続ける行。

三日目くらいから眠気はなくなった。最も

すよ」教師と生徒の会話。

「由緒正しい貧乏人の底力ですよ」

「今までの人生の中でどの時期が一番良かったかと聞かれれば、躊躇なくあの貧乏な時代をあげたいですね」

祖母や母からは「何か世のため人のためになるような人間になれ」と常日頃言われていた。

だからだろうか、小学生の時、テレビで観た「千日回峰行」を片時も忘れることはなかった。

高校を卒業したものの、吉野まで行く旅費もない。一年間アルバイトしてお金を貯める。そして旅立ちの日。母親は心を込めて味噌汁を作り、息子は飲み、母親はその器をゴミ箱に捨てた。「もうおまえの帰ってくるころはないと思いなさい。砂を噛むような苦しみを味わってきなさい」

「日常」という「行」の難しさ

ひとつの「行」を満たし、次の「行」に入っていく。そして更に次の「行」へ。

それぞれがあまりにも過酷で生死の狭間を彷徨うような苦行。

何故そこまで?と思う。

自分を許せなかったのだろうか。

苦行に入ることで、無意識に内なる「父」を振り切ろうとしていたのだろうか。

今、遠い昔のこの人の無意識を探る意味はない。

これらの行をやり遂げたのは、間違いなく

苦しいのが「飲まず」だという。途中、死と隣り合わせの一日があったが、それを乗り越える。満行した後は誰もが歩けないくらい弱る。「抱えられて出てくるようでは駄目だ。強い行に対して、自分なりのこだわりがありましたね」

四無行に限らず、苦難に遭うといつも「これが日常なんだ」と考えるようにしている。「行をやる」と日常の何でもないことに感謝できる。水を飲むことも感謝です」

行き着いたのは「感謝の世界」。

大自然と自分が強い絆で結ばれていることを強く感じた。

塩沼さんの回峰行中の日誌に書かれた言葉。「伸び伸びと生きて、伸び伸びと耐えること」

由緒正しい貧乏人

中学二年の時に両親が離婚するまで、家庭は荒みきっていた。父と母、祖母、塩沼少年。父親は酒飲みで、母親に暴力をふるう。母親の髪を掴んで引き摺りまわし、パジャマ姿のまま外に放り出したこともある。気に入らないことがあると飯台をひっくり返す。サラリーマンだった父は給料をこまかし、ほとんど家にお金を入れない。そのせいか、貧乏に対する我慢強さは人より身についた。

離婚が成立。父は出て行った。ほとんどの家財道具を持って。

その父の背に向かって母は「この人に幸せ

祖母の、母の、包み込むような心と澄んだ眼差しがあったからだ。

仙台市・秋保の鄙びた里にこの人が住職を勤める慈眼寺がある。

千日回峰行を終えた後、建立した。

朝四時半に起きると、お堂の扉を全て開け、仏に水とご飯を供え、修行僧と共に堂内を雑巾がけする。

灯明に火を灯し、線香を供えて、六時に勤行が始まる。住職の座の一段高いところではなく、小僧と同じ板の間で太鼓や木魚を叩く。法螺貝も吹く。

食事当番もする。洗い物もする。修行僧と一緒に食事する。

毎週日曜日には護摩を焚く。

この人の心の真ん中に、ひとつの言葉が端然と立っている。

「人生生涯小僧のころ」

関連サイト情報

<http://www.jigenji.net/>

福聚山 慈眼寺

宮城県仙台市太白区秋保町馬場字滝原89-2

TEL.022-399-5333